

御報告戴けなかった方々に、この紙面をお借りして一言陳謝の意を表する次第である。

- (1) 「一般教育研究」の発行に関する要項2、目的 一般教育研究 第二号 1972年4月
- (2) 宇川勝美 大学の大衆化と教育方法の改革 一般教育研究 第二号 1972年4月
- (3) 堀地武 後期一般教育科目について一くさび型カリキュラムおよび一般教育責任体制との関連一 一般教育研究 第三号 1973年1月

- (4) 上掲書P.59
- (5) 山内重幸 46年度共同研究科目「現代思想と学生」についての総括 一般教育研究 第三号 1973年1月
- (6) 山内論文は創刊号よりの掲載である。
山内重幸 運動としての一般教育の基本点をどう抑えるか。一附「共同研究科目」中間総括一 一般教育研究 創刊号 1971年10月
- (7) 神田融 大学の美術教育一般教育研究 第二号 1972年4月
- (8) 桂孝二 明治44年1月の石川啄木 一般教育研究 第二号 1972年4月

「共同研究科目」について

瀧 川 一 幸

一般教育研究に談話室と云う欄ができるそうである。その欄の寄稿文を研究室委員の人から依頼された。思うに、私は強いて何か云ってみたい事を持っている訳ではない。それでその人にその旨を云ったのであるが、第三号の研究討論会に於ける発言でも良いから是非にとの事でこの文を書く次第である。

二月二十三日第五回一般教育研究会が開かれたが、その時のテーマは第三号一般教育研究についての論議が主で寄稿者を中心に討論があった。その中でいつも熱心に様

々な協力をして下さっている山内先生の『46年度共同研究科目「現代思想と学生」についての総括』と云う論文に対する討論があり、私もいくらかそれについて発言をしたのでそれについて少し述べてみたい。

46年度より、一般教育の中で、共同研究科目、総合科目、プロゼミと云った従来ない全く新しい形態を持つ科目がかなりの数で開講された。そしてこれらの科目の開講の理由は、主として学生の従来の<講義形式>の科目に対する不満に端を発していた事は周知の事である。

即ち、教官が一方向的に多人数の学生に向けて講義し、学生と教官間に何ら議論もない授業形態に対する学生側の不満に答えようとして開講されたのである。その原因は多々あったし、一言で云えぬものであろうが、(またそうした不満は現在に於いて解消されたとはかならずしも云いえないであろうが)、学生側からの<多人数授業>、<高校とたいして変らぬ授業のくり返し>等の声にあったように、授業に魅力を持ってない点にあったと思う。また教官側から云えば、学生の真理探求への熱意ある自主自学の学習態度の欠除の点にあったと思われる。その結果として、講義はただ聞くだけに終り、知識や視野を拡大する努力は無くなり当然、各学生個々の物の見方、考え方が育たず、何の批判も創造もなく、高校時代の受験戦争で培われた暗記に似たような勉学となり易い状況があったと推測される。一般教育の主眼が、教養(Bildung——人間形成)にあるとするなら、そのような場では人間形成は不可能事であり、一般教育の責務は形式的には果されているように見えようが、全く実質的には果されていないのではないかと云う一般教育の一種の危機的状況がこれら新しい形式の科目開講の理由であったと思われる。

現在、それ以来二年余、一般教育はこれらの責務をどれだけ果たしつつあるだろうか？それも形式的にはなく実質に於い

て？

少し話が飛躍してきたようであるが、この問は一般教育に携わるすべての人がたえず自分の胸中に秘して自問自答すべき問であろう。そして、現在、外面的、形式的な一般教育の運営面などが問題となる長たらしい会議(それも必要ではあろうが)ばかりでなく、実質的な一般教育の内容を検討する機会、例えば一般教育研究会、のような研究が盛になるようにならねばならないのだろう。

このような私の考え方から云って、共同研究科目担当の教官諸氏に対して、まず述べたいのは、山内教官の二つの論文にも所々に述べられているように、負担ある授業をひき受けておられる熱意に対して敬意を表したいと云う事である。学生との共同研究と云えば、指導の困難さ、運営の雑多な負担は大きいであろう。しかも現代的な状況の中では、問題多い多様複雑な社会機構に対応して学生の多様な欲求と考え方が在ると考えられるが、そうした意識内容と程度・考え方の違いを克服して学生達の討論を指導するには、広い視野、柔軟な思考等の他に自分の明確な考え等も必要であると思われるのでその苦勞がしのばれるのである。(現代では個人の人間性の上に立った人格形成は非常に困難になっている事が、一般教育の最大の問題であると思う。)

さて、私が研究会に於いて発言した点

は、共同研究科目の内容の一部に対しての小さな疑問点に関してのみである。即ち、一般教育研究の論文に於いても散見できる、ホットな社会問題（例えば沖縄問題・中教審答申等）を授業内容の一部にする点に疑問を覚えたのである。

普通、ホットな社会問題に関して、学生間、あるいは学生・教官間に討論は十分あるし、またあり得る。しかし、そのような場合、普通はティーン等の形を取るのではなからうか？そして、このような形をとる事はそれなりの理由があると考えられるからである。

即ち、通常単位のある科目は学問的なものである。学問的評価が安定していることが前提とされている。もし、ある考え方がまだ学問的評価が十分でない場合やまた自分個有の考え方を学生に対して述べる場合は、〈一つの考え方としては…〉とか、〈私の考えでは…〉と云うように明確に一般的学問的評価を受けている考え方と相異なる旨を学生にことわるのが常識であると思われる。

ところで、ホットな社会問題を授業内容とする時、そこに白熱する論議が起ることは十分考えられる。と同時に、それに対する多様な考え方も述べて来て、恐らくそれ全体に対する普遍妥当性（Allgemeingül-

tigkeit）に合致した結論ないしは考え方も出てこない事も十分考えられる。この点が、ホットな社会問題を授業内容とする時の長所でもあると同時に短所でもある点である。現実起っている事は変化しつつある事で未来の確実な結果を見通せない。それ故、価値形成を重んずる学問としての評価はでてこないと思われる。であるから、普通は通常の単位のある科目と異ってティーン等の形をとると思われるのである。恐らくここには、学問としての考えの次元と現実の社会生活の次元と云う次元の相違の常識が在るのではなからうか？

先にも述べた事だが、全体的に云って私は共同研究科目に対して賛成であるのだが、ホットな社会問題を授業内容とする時、学問としての意義がどのへんにあるのか素朴な疑問を感じたので質問したのである。もとより、死した事より生きている事を愛するのは人間の常ではある故に、ホットな社会問題が学生に生き生きした関心を呼びます事。それに人間形成期にある学生にとっては過去よりも現実の社会にこそ最も熱烈な関心を寄せている事は、私は理解しているつもりである。

最後に、私自身共同研究科目に対して十分の認識がないので誤解があるかもしれない点をことわっておきたいと思う。